

日蓮大聖人御書全集

あぶつぼうごしよ

阿仏房御書

ほうとうごしよ

(宝塔御書)

新版
1732
く
1733

阿仏房御書 (宝塔御書)

けんじ ねん がつ にち あぶつぼう

建治 2 年 ('76) 3 月 13 日 * 阿仏房

おんふみくわ ひけん そうら お そうら ほうとう

御文委しく披見いたし候い畢わんぬ。そもそも宝塔の

ごくよう もの ぜにいつかんもん はくまい 品々 贈もの 確

御供養の物、銭一貫文・白米・しなじなおくり物、たしか

受取 そうら お おもむき ごほんぞん ほけきよう

にうけとり候い畢わんぬ。この趣、御本尊・法華経にも

懇 もう あ そうらう みこころ 安 思 そうら

ねんごろに申し上げ候。御心やすくおぼしめし候え。

いち おんふみ い たほうによらいゆげん ほうとう なにごと あらわ たも

一、御文に云わく「多宝如来涌現の宝塔、何事を表し給

うんぬん

うや」と云々。

ほうもん だいじ ほうとう 判

この法門ゆゆしき大事なり。宝塔をことわるに、天台大師、

てんだいだいし

もんぐ はち しゃく たま とき しょうぜん きご にじゅう ほうとう
文句の八に釈し給いし時、証前・起後の二重の宝塔あり。

しょうぜん しゃくもん きご ほんもん へいとう しゃくもん

証前は迹門、起後は本門なり。あるいはまた、閉塔は迹門、

かいとう ほんもん すなわ きょうち にほう 繁

開塔は本門、これ即ち境智の二法なり。しげきゆえにこれ

せん さんしゅう しょうもん ほけきょう きた こしん

をおく。詮ずるところ、三周の声聞、法華経に来て己心

ほうとう み

の宝塔を見るといふことなり。

いま にちれん でしだんな

今、日蓮が弟子檀那、またまたかくのごとし。

まつぼう い ほけきょう たも なんによ 姿 ほか ほうとう

末法に入つて法華経を持つ男女のすがたより外には宝塔

きせん じょうげ 選

なきなり。もししからば、貴賤上下をえらばず、

なんみょうほうれんげきょう 唱 わ み ほうとう わ

南無妙法蓮華経となうるものは、我が身宝塔にして我が

み たほうによらい

みようほうれんげきよう

ほか ほうとう

身また多宝如来なり。妙法蓮華経より外に宝塔なきなり。

ほけきよう だいもく ほうとう なんみようほうれんげきよう

法華経の題目、宝塔なり。宝塔また南無妙法蓮華経なり。

いま あぶつしようにん いっしん ち すい か ふう くう ごだい

今、阿仏上人の一身は地・水・火・風・空の五大なり。

ごだい だいもく ごじ

この五大は題目の五字なり。

あぶつぼう ほうとう ほうとう

しかれば、阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、

ほか さいかくむやく もん しん かい じよう しん しゃ ざん

これより外の才覚無益なり。聞・信・戒・定・進・捨・慙の

しつぼう 巖 ほうとう たほうによらい ほうとう くよう

七宝をもつてかざりたる宝塔なり。多宝如来の宝塔を供養

たも 思 そちら わ み くよう たま

し給うかとおもえば、さにては候わず、我が身を供養し給

わ み さんじんそくいち ほんがく によらい

う。我が身また三身即一の本覚の如来なり。

しん たま なんみやうほうれんげきやう とな たま

かく信じ給いて南無妙法蓮華経と唱え給え。ここさなが

ほうとう じゆうしよ きやう い ほけきやう と ところあ

ら宝塔の住処なり。経に云わく「法華経を説く処有らば、

わ ほうとう まえ ゆげん

我がこの宝塔その前に涌現す」とは、これなり。

有 難 そうら ほうとう 書 顕

あまりにありがたく候えば、宝塔をかきあらわしまいら

そうろう こ 譲 しんじんごうじやう

せ候ぞ。子にあらずんば、ゆずることなかれ。信心強盛

もの しゆつせ ほんかい

の者にあらずんば、見することなかれ。出世の本懐とは、

これなり。

あぶつほう ほつこく どうし もう じやうぎやう

阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし。浄行

ぼさつ生 変 たま にちれん おん 訪 たも ふしぎ

菩薩うまかわり給いてや、日蓮を御とぶらい給うか。不思議

ふしぎ

おんごころざし

にちれん

知

じょうぎよう

なり、不思議なり。この御志をば日蓮はしらず、上行

ぼさつ

ごしゅつげん

ちから

任

そうろう

べつ

ゆえ

菩薩の御出現の力にまかせたてまつり候ぞ。別の故はあ

ほうとう

ふうふ

拜

るべからず、あるべからず。宝塔をば夫婦ひそかにおがま

たま

くわ

もう

そうろう

きようきようきんげん

せ給え。委しくはまたまた申すべく候。恐々謹言。

さんがつじゅうさんにち

にちれん

かおう

三月十三日

日蓮

花押

あぶつぼうしようにんのもと

阿仏房上人所へ